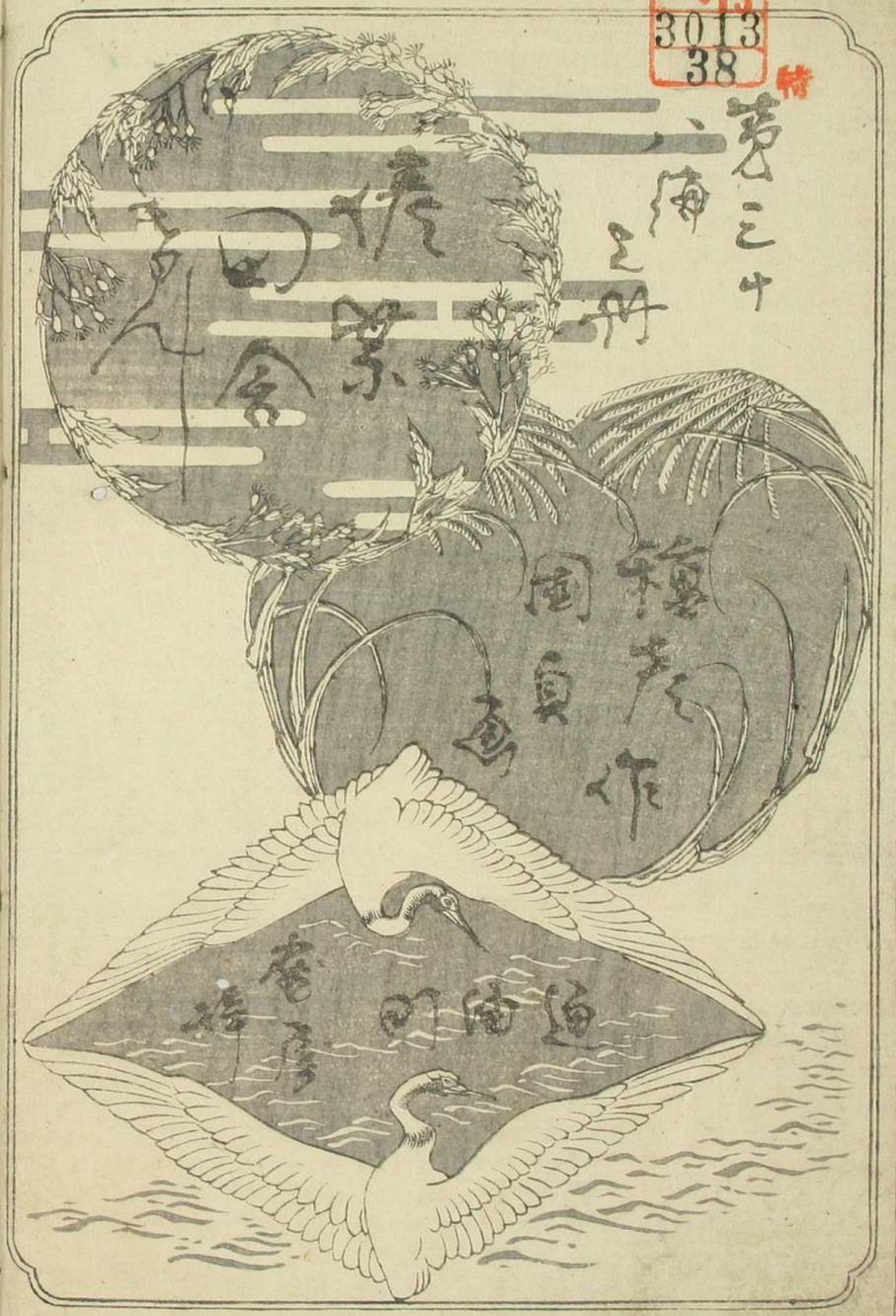
へ13
3013
38

へ13
3013
38



延宝四年撰「至来集」定奥の句ハ「名も似ぎ月こそ光れ九行燈」とゝ
るハ軒政の謠をやつし名ゆも似ぎと其形を雖ぜ「ゆ」又近く安永九年
の作「隣塵夜話」の序ハ「女郎の実と玉子の四角ハ魚物と歌ひ一ハ行燈
ハ丸く四角る五徳ゞ出来重宝とひ一云云」と見え延宝より其ゆ百余年
暗合の同論わり。今ハ座敷の行燈ハ丸い物のやうハ心え箱火鉢でつくる五
徳ハ角る物と定まりしハ専ハ流行れ目ゆ訓し故ゆそゆり。此草紙ハ光氏ゞ
大將髭と海老の尾のやうハ割しハ亀戸の案ゞ。初めの程ハ異み髪と
あのれまで思ひ一ゞ繪る羽ゆ板押繪の類。開帳庭の納め物又吉原の
軒燈籠。團扇ハのとより煎餅形。柔悪此姿を写さハ目訓怪き髪の風
ともいふ悪い前よりのげ一ハ二箇器の論の止一ハ是同画の流行せ一功
る べ一。それハひれて自然拙作も源氏とハ名も似ぎとゆ誹ゆもうす
らぎのよく末まで續んゝと角る五徳と強云ハ假我身勝手を如斯

柳亭種彦誌

天保四癸巳孟春　鶴屋喜右衛門板

御免江戸暦開板所　毎年十月下旬ごろ書初め申し候　序注文元　作者　作者

載陽帖　南山禅師書　東海道四季和文章石摺　木曽海道

新撰　日本名所之繪　唐紙摺一枚　道法早筭用道中記一枚摺

新撰　女古狀揃園生竹　大本半紙本　両品出来　高井蘭山編撰

還魂紙料　柳亭種彦隨筆　古画入二冊

田喜菴輯　芦のしたもえ　紅住菴記設　芭蕉翁図分の雨居の図　水石の景を摸して紀市の風景まふ

簑笠翁隨筆　玄同放言　初編二編共三冊　六冊　第三編三冊　近刻

右才三編三冊　巻頭の序文に編すべて京師物見考　倉歌の景　初編二編にいまだ考を尽せり　雅俗とあくまで同じ　漢籍　俗書　世俗　ものにあらずとも無あるべきものにあらずとてまづ彼の序のよりて板家しん

三畝荘木木按輯　同輯　芳州集　全一冊　板　開関以前なりし出羽陸奥甲斐信濃などの人々の詩歌を集めたる書なり　文化三年の序あり　寛政の末頃の人なれば附合は京阪地方の流行一時に盛なりしもの

載蘭集　全一冊　追刻　文化三年の序あり　京阪地方の流行一時に盛なりしもの

歓童戯筆　遊言画手本　一名　鳥羽繪早まなび　巣

廣益塵劫記　懐中早割大全　小本　一冊　上達すべき初学のために平仮名にて懇ろに教へやすく

新形染彩目　植花手引糸　前編出来　はなはいまだ人の分ざるものを出す集　前北齋為一筆　後編嗣刻　先生注ふ初学こらせ　奇妙なり

芝居役者似顔早稽古　後編　全二冊　五渡亭國貞画　お編みすれば名人集めて画のたしなみを教ふ初学の為にもよく合ひるべき稽古なり

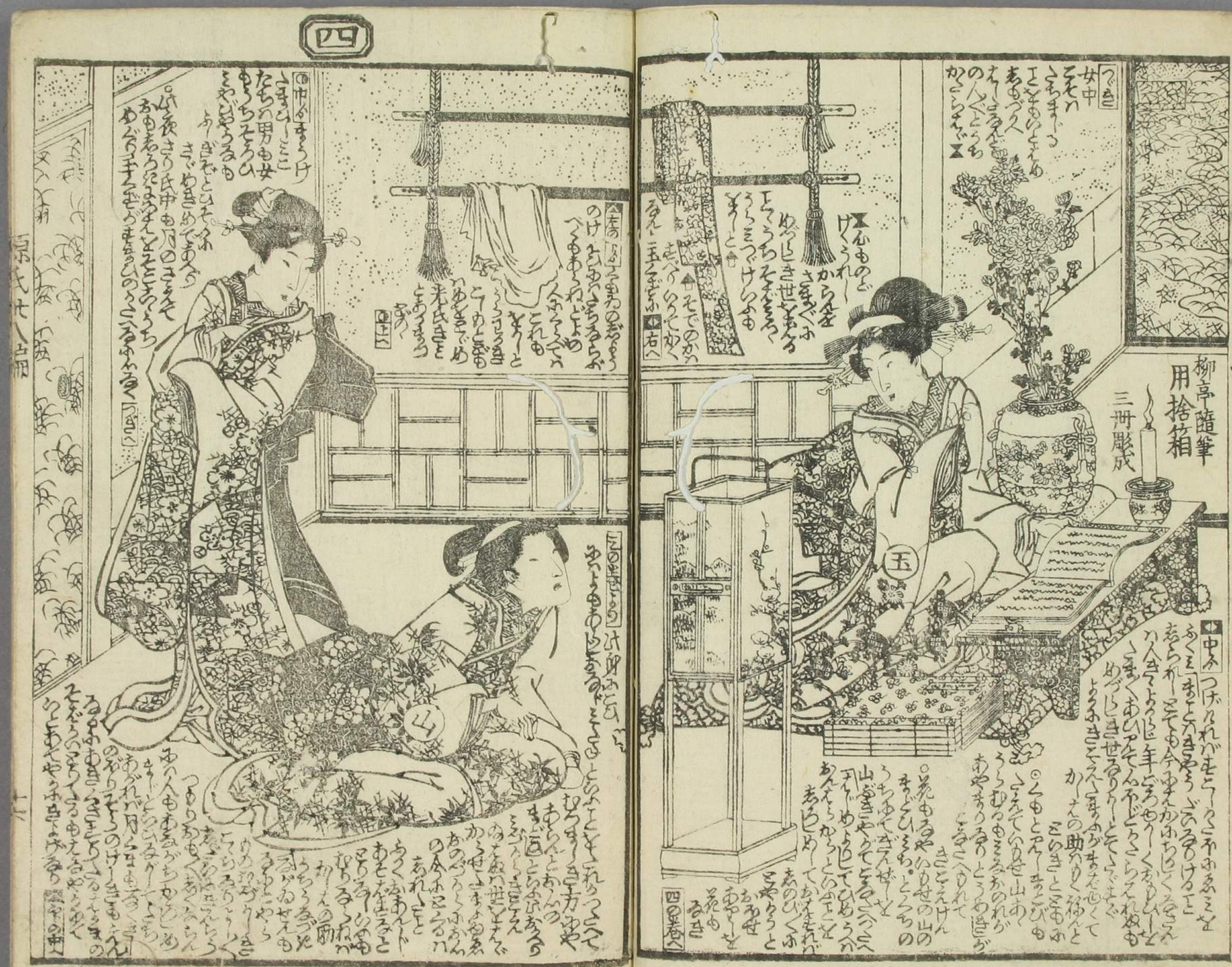
八文字自笑評　三篭津藝品定　役者評判記　全三冊　相撲ひ文淡信附録　東巳月の頃　役者の義を評のまえ流行おのの当時を事に関係いと

即考百籤　全一冊　籤箱添ふ　籤箱の祐契ありて我が祐ふ神仏のごとし

三十八編下冊
玉葛
祖母
加義の社
玉

柏
山

柏
袖


四
柳亭隨筆
用捨箱
三冊彫成
五
山

袖
十

仙鶴堂藏板目録

字寶節用千金藏　大全書狀案文

源氏百人一首宝文庫　女用文章色紙染

御家正流　子供案文

柳亭隨筆　還魂紙料　初編既刻　二編近刻

田舍源氏文章のかゝり　たゝう上仕立
廿八編目奥書よりそ〻めて編ゝ
中なげ略ゝぞんじの風流の淫を軽び
ゆり為年もゝるきれいの書
あきやの淫用形上仕

淫を遊び袋入　種彦作書
小繪ぞうし　貞秀画図
昔咄　史樊たゝア　全二冊
同　きちちゆんさんく　全二冊
同　浦ゆ茶　全三冊
茶番のいろは　全二冊
以上先年売出ゝ分下近刻
昔咄　楠判官　全三冊
同　あとろき判官　全三冊

地本類東錦繪問丸御摺物所　鶴屋喜右衛門